

# 特別号： ミャンマーのサイクロン被害復興状況視察報告

日本ミャンマー友好議員連盟  
会長 参議院議員 渡辺秀央



7月11日午前、ヤンゴンの日本人墓地にて参拝、献花後のひととき  
前列左より西村眞悟衆議院議員（日本ミャンマー議員連盟幹事長）、渡辺秀央参議院議員（日本ミャンマー議員連盟会長）、野川保晶駐ミャンマー大使、松下新平参議院議員、後列駐在商社役員、在日本人会会長、駐在武官の方々



日本人墓地にある慰霊碑“戦没者霊園の由来”全文

1941年～45年の大東亜戦争において、日本軍はこのビルマまで進攻した。当時ビルマは英国の植民地であり、日本軍は戦略上の必要から、この地で英・米・支軍と戦ったのである。だが戦いは我に利あらず、日本軍は19万の戦没将兵を遺して敗退した。この碑は、その時の戦没者の慰霊碑である。

この作戦間、ビルマの人々は日本軍を歓迎し、援助し敗戦後も変わらぬ仏心で我々に接してくれた。本当にありがとう。

この墓地は、タモエとチャンドウの旧日本人墓地の代替として、ヤンゴン日本人会の尽力によって造営された。

しかし、霊園中央の記念碑は日本政府によって建てられたものであり、霊園の造園その他は、全国のビルマ従軍生存戦友および遺族の浄財によって完成された。1998年3月全ビルマ戦友団体

## ミャンマーについて

時事通信 No.357 平成 20 年 7 月 18 日(金)

西村 眞悟

この度、急きょミャンマーに行きサイクロン被害の状況と復興の様子を見てきたので、やはりミャンマーのことをお伝えします。福田内閣の竹島記述の問題やその他のことで怒っていると、ミャンマーのことを述べる機会を失しますから。

### 1、ミャンマー概要

面積 68万平方キロ（日本の1・8倍）

人口 5737万人

人種 ビルマ族（7割）、他200近くの少数民族

宗教 小乗仏教

GDP 一人当たり230ドル

中部は灼熱の大地、北西部は三千メートルを越す山岳地帯

### 2、私とミャンマーとの関わり

民社党（平成6年12月9日解党）の公式ミャンマー訪問団として、始めてミャンマーを訪れたのが平成6年5月。

公式訪問団とは言っても、団員は、私と党本部の寺井融そして秘書の向山好一の三人だけで、費用はほぼ自腹。

この時期は、アウン・サン・スーチー女史が、ちやほやされていてミャンマーの政権は「軍事政権」であるから悪であるという思い込みが民社党内でも濃厚で、ミャンマー訪問には消極的な雰囲気だった。これが、ささやかな訪問団になった原因だ。

しかし、民社党は青年を東南アジア各地に自由に行かせて経験を積ますという研修を繰り返しており、その中で育った寺井融はビルキチ（ビルマキチがいの略）になっており、彼の工夫で単なる旅行ではなく「民社党訪問団」となった。民社党は同年末に解党してしまうので、結局、これが、民社党のただ一回のミャンマー訪問団となってしまった。

始めてミャンマーに入国して歩き回って感じたことは、日本の報道は事実を伝えていないと言うこと。日本のマスコミは、同じ「軍事政権」でも北朝鮮は「地上の楽園」と伝えてきて非常に甘く、ミャンマーの「軍事政権」は悪の権化のように伝えていた。

事実は全く逆で、ミャンマーの人々は信心深く穏和で親切、首都ヤンゴンはニューヨークやパリ、ロンドン、東京、大阪よりも安全で、浮浪者は皆無。

「豊かさの中の貧困」と「貧しさの中の豊かさ」、ミャンマーは日本人が忘れたこの豊かさをたたえていた。

そして、その「軍事政権」の親分のキン・ニュン第一書記は、禁欲的な威厳があり、明治の大久保利通とはこのような雰囲気のものではないかと思うほど立派な陸軍中將であった。

対して、アウン・サン・スーチーの言っていることは、英国流・米国流の民主主義を直ちに実現させない政権はすべて悪だと言うに等しくミャンマーの現実を無視していた。事実、彼女は英国で育ち、英国人の夫と子供と家族とともに長年英国に住んでいてミャンマーを知らなかった。

私は、キン・ニュン第一書記に、スーチー女史の言っていることは空論である。自信を持ってミャンマーはミャンマーの民主化を着実に進めて欲しいと言った。

すると彼は、まずはじめに、ミャンマーの英国からの独立は、日本軍のおかげであると日本への感謝の意を表明して、

「我々四千五百万のミャンマー国民（その当時の人口）は、この大地で生まれこの大地で死ぬ。英国で育ち、英国に家を持つ人には分からない」と答えた。

私は、ミャンマーが大好きになり、また、この親日的な国との友好を深めるのが日本の国益にかなうとの思いから、以後毎年一回から二回の割でミャンマーを訪れることになった。

ある時は、スーチー女史が、日本のポリオ生ワクチンの援助を「軍事政権を利用のだけだ」と非難したので、では、果たしてそうかと、首都を遠く離れたミャンマーの田舎のポリオ生ワクチン接種現場を見に行った。

そこでは、多くの若いお母さんが村の学校に子供を抱えて集まっていた。楽隊が演奏して踊りも

始まった。まるでお祭りのようであった。そして、お母さん達は幸せそうにニコニコ笑っていた。私には、この多くの子供達が日本の援助により小児麻痺の恐怖から解放されることが、何故「軍事政権を利するだけだ」と非難するのか、スーチーの言うことが馬鹿らしかった。そして、日本のマスコミは、何故スーチーの言うことだけを報道して、このようなすばらしい援助の場所を取材しないのかと思った。

その後、平成17年の春には、多くの仲間とともにミャンマーを訪れ、日本で集まった浄財でヤンゴン郊外の村に小学校を寄付することができた。

キン・ニュン第一書記と最後にあったのは、平成14年の秋であった。一旦握手して別れた後、ドアから出ようとする私をキン・ニュンが「シンゴ!」と呼び止めた。振り向くと、下を向いていたキン・ニュンが私を見つめ、「今度来てくれたときには、私と一緒に我が国の国境地帯を廻ろう、楽しみにしている」と言った。その後、彼は失脚し会えなくなったので、この時の彼の様子が強く思い出される。

そして、キン・ニュン失脚後、私はミャンマーに行っても新しい政権幹部と会わなかった。キン・ニュンの今の軟禁状態にある境遇を思い、義理と人情があれば、いそいそと新しい政権幹部と会うことはないと思っていた。

### 3、サイクロンの襲来

5月2日から3日にかけてミャンマー南西部を襲ったサイクロンは、史上初めての大災害をもたらした。サイクロンは、今までミャンマー西部の高い山脈に遮られ、西隣のバングラデシュを襲ってもミャンマー中心部にくることはなかった。しかし、この度は秒速60メートルという超大型サイクロンが史上初めて直撃してきた。しかも、その速度は時速15キロほどと極めて低速で、ヤンゴンをはじめミャンマー中心部は長時間の暴風雨に見舞われたのである。現在死者は8万人を超え、行方不明者を加えると人的被害10数万人におよんでいる。

この報を受け、直ちに日本ミャンマー友好議員連盟（平成6年結成）の総会が招集され、外務省から我が国の救援実施状況を聴いた。

その後、中国四川省を地震が襲ったが、ミャンマーのサイクロンによる人的被害は四川省の地震を遙かに上回っている。しかし、日本のマスコミは、もっぱら四川省の地震を主眼として救援の呼びかけをした。

友好議員連盟のメンバーは、貧しいミャンマーが如何に日本に期待しているかよく分かっている。親日国ミャンマーにこそ援助の手をさしのべるべきである。

そこで、通常国会が終了したのをうけて、急きょ議連としてミャンマーの被害と復興状況を実際に見に行こうと言うことになり7月8日から12日までミャンマーを訪れテイン・セイン首相以下5名の閣僚と会見し、ミャンマーの物流の中心である被害の激しいヤンゴン港を視察した。

訪問団のメンバーは、議連会長の渡辺秀央参議院議員、議連幹事長の私そして松下新平参議院議員。

### 4、被害状況と支援要請

被災地は、南西部のイラワジ川とアンダマン海に接するミャンマー中枢部で、130万エーカーの農地が失われた。そして、1500から2000の学校が倒壊した。国の物流の80パーセントを担うヤンゴン港の機能が低下して物資の欠乏と物価上昇をもたらした。国民生活に影響が出始めている。

従って、主に農業復興への支援、学校建設への支援そしてヤンゴン港機能回復への支援が首相からも各大臣からも求められた。

また、サイクロン予測と災害予防の為には最新のレーダーがいるとの要望と、海水の逆流はマングローブの森によって防げるので森を育成する為の支援を要請された。現在ミャンマーにある気象レーダーは、1980年に日本の支援で設けられたが、老朽化している的確なサイクロン予測ができなかったらしい。

#### ①農業

ミャンマーは農業国である。しかし、被災地は農耕用の水牛をほとんど流されて失ってしまった。そのために、水牛に変わってトラクターと耕耘機を強く求めている。あの灼熱の堅い大地を人力だけで耕すのは無理だ。

また、土地改良の技術を日本から学びたいと望んでいる。

#### ②ヤンゴン港

ミャンマーの物流の80パーセントをヤンゴン港が担っていた。しかし、未だ75隻の沈没船が

放置され港に大型船が入れない。しかし、ミャンマーにはサルベージ船がない。日本に港内の測量とサルベージを求めている。

### ③学校建設

村が消滅してしまつたところがある。そこでは、学校も村もともに流されてしまった。従つて、住民が避難できるしつかりとした建物としての学校を建設することは、村の防災上急務である。今、被災地の子供達は、テントで勉強している。潰れた学校は1500から2000という数に上る。

我が国は経済的な観点からではなく、友好と友情の印に、ミャンマーの将来を担う子供達が学び、住民が避難する場所としての学校建設に本格的な援助の手をさしのべるべきである。ミャンマーは日本人と同じ心情をもつ人々の国（おそらく唯一の国）だから、我々の友情を理解してくれる。

以上が、首相をはじめ各大臣から訪問団によせられた日本に対する支援要請の概略である。特に、農業への支援は、世界的な食糧危機をひかえたこの時期のもっとも重要な支援であろう。ミャンマーでは米の二毛作はおろか四毛作も可能だ。食料自給率40パーセント未満の日本にとって、ミャンマーの農業への支援要請を真摯に実行すべきである。文字通り、情けは人の為ならず、である。

## 5、「民主化要求」とは何か・・・欧米のダブルスタンダード

建国以来、ミャンマーは国内の少数民族の反政府ゲリラとの内戦が絶えず放置すれば分裂する危機が続いていた。

その原因は、イギリスの少数民族により多数派のビルマ族を支配させるという伝統的な分割統治にある。イギリスからの独立とともに、少数者は支配の特権を失うわけで、その不満が内戦に発展するのは必至である。

従つて、この国家分裂の危機を克服してミャンマーを統治する政権として「軍事政権」が誕生するのは当然の帰結である。国民教育を奪われた英国による植民地支配の後で、知識のある人材を抱えた訓練された組織は軍隊しかなかったからである。

そして、軍事政権のキン・ニュン第一書記の時代に、内戦はほぼ克服される。そして、キン・ニュンは、平成15年に民主化実現に向けたロードマップを発表する。

しかし、この間、西側諸国は、ミャンマーが「軍事政権」であるが故に、援助を停止していたのだ。特にアメリカは「制裁」を実施していた。我が国も、この西側の動きに追随して独自の行動をとらず援助を停止した（但し、我が国は人道援助は実施していた）。

この状況で特にミャンマーを苦しめ、また、腹に据えかねる思いにさせたのは、アメリカとイギリスの民主化要求と制裁だと思う。何故なら、独立後の内戦を必然的にする残酷で非民主的な植民地支配をしていたイギリスが民主化を要求する等は許されないではないか。また、アメリカの制裁はミャンマーの縫製業を中心とする国内産業に打撃を与え、失業の増加と外貨不足をもたらした。さらに、この英米に気に入られてミャンマー国民を苦しめる措置を歓迎し、日本からの人道援助も非難していたのが、イギリスで育ちイギリスに家族と家を持つスーチー女史であった。そして、ミャンマーは世界最貧国に低迷し続ける。

ところで、英米は、苦しみながらも民主化のプロセスを歩もうとするミャンマーには制裁を課し、民主化など全く考えようもしない中共や北朝鮮には民主化要求などしていない。

これを彼らのダブルスタンダードという。要するに、英米にとって、民主化要求は外交手段で相手を支配する方便に過ぎない。従つて、英国や米国のミャンマーへの制裁をミャンマーは「第二植民地主義」（キン・ニュン第一書記）と受け止めた。

当然である。

そしてこの中で、馬鹿を見た見本が日本であった。我が国は、英米の民主化要求を額面通りに受け取って追随し援助停止を続けたものだから、アジアのもっとも親日的な国ミャンマーを中共の懐に追いやってしまったのだ。中共は今や、ミャンマーを経てインド洋に進出して、そこに海軍力を展開するところまできている。

本当にミャンマーが民主化するのを望むのならば、最貧国にして内戦で苦しむミャンマーに惜しみなく援助を与えて励ますべきであった。英米にも我が国にもその力はあった。

私には、西側の制裁と援助中止は、ミャンマーの国民を苦しめ民主化の歩みを停止させたとしか思えない。

しかし、ミャンマーの「軍事政権」は、サイクロンの被害直後に予定通り新憲法採択のための国民投票を実施して国民から新憲法案の承認を受け、2010年には複数政党制による総選挙を実施して民政に移管すると発表している。つまり、現政権は、キン・ニュンなきキン・ニュンの民主化ロードマップを忠実に実行してきている。



このような歩みを続けるミャンマーへの制裁は続けて、北朝鮮への制裁は解除するアメリカとは、如何にいい加減な国であるか明確に分かるであろう。

そこで、我が日本であるが、サイクロン被害復興援助を開始するとともに、直ちに本格的な援助を再開すべきである。もはや中共への援助は、するのがおかしいのであるから直ちに停止して、その分ミャンマーへの援助に振り向けるべきである。

欧米は、ミャンマーの2010年の選挙を見守るという姿勢をとるであろうが、決してそれに追随してはならない。我が国は、民主化に向けたプロセスを歩むミャンマーを支援すべきである。ミャンマーに対して、欧米のように民主化を方便に使うてはならない。

そもそも、英米などは自由と民主主義とえらそうなことを言う資格はない。この度の訪問でもミャンマーの閣僚に語った。

「自由と民主主義の国アメリカの建国の父であるジョージ・ワシントンの家に行かれよ。庭に奴隷の墓がある。七〇体の奴隷がここに埋葬されていると説明書きがあるだけで名前も墓標もない。

あいつらの自由と民主主義とは自由を剥奪された人間、つまり奴隷を持つことができる自由と民主主義なのだ。

ミャンマーは自信を持ってミャンマーの民主化を進めて欲しい」。

## ミャンマーのサイクロン被害復興状況視察報告書

平成20年7月15日

日本ミャンマー友好議員連盟

会長 参議院議員 渡辺秀央

表記の件について、日本ミャンマー友好議員連盟は、次の通りミャンマーを訪れ、首相をはじめ各閣僚と会見し現地被害状況を視察しましたので、その概略をご報告いたします。なお、このサイクロンは風速が毎秒60メートルと極めて強力なもので、去る5月2日から3日にかけてミャンマー南東部を襲い、同国が今まで経験したことない甚大な被害をもたらした。

記

### 一、視察実施期間

平成20年7月8日より同月12日まで

### 二、視察目的

被害復興におけるミャンマー側の要望を知り我が国援助の効果的な実施と我が国とミャンマーの友好関係増進に資する

### 三、視察団参加議員

渡辺秀央議員連盟会長、西村眞悟衆議員議員、松下新平参議院議員

### 四、視察状況

#### 1、(日程概略)

視察団は、8日18:45(現地時間、以下同じ)ヤンゴン空港に到着し、同日に野川保晶駐ミャンマー大使から、サイクロン被害復興状況を中心にした情勢報告を受けた。次いで翌9日9:00、首都ネーピードーに移動し、10日12:00にネーピードーを発ってヤンゴンに戻るまでの間に、以下の各大臣と順次会談して、意見の交換と我が国に対する要望事項を聴取した。テイン・スエ運輸大臣、テー・ウー農業灌漑大臣、ニャン・ウイン外務大臣テイン・セイン首相(以上、9日)、チャー・ミン厚生大臣(10日)ネーピードー日程を終えてヤンゴンに戻ってからは、10日午後にはチョウ・トウ外務副大臣、12日にマウン・マウン・スエ社会福祉救済復興大臣と会談し、中間日の11日には午前中に日本人墓地に参拝し献花するとともに、午後は運輸副大臣の説明を聞きながらヤンゴン港の被害状況を水上から視察した。



7月9日  
ヤンゴンから空路1時間首都ネーピードーの空港



7月9日  
空港から各  
省庁に向か  
う、首都ネ  
ーピードー  
は閑散とし  
ている



訪緬団が宿  
泊したゲスト  
ハウス、一  
つの建物左  
と右に入り  
口が有る



## 2、(要望の内容)

当視察団は、テイン・セイン首相と5人の大臣そして2人の副大臣と会談したのであるが、各会談の冒頭には、渡辺会長から、サイクロン被害へのお見舞いと激励の挨拶があり、復旧に関する日本政府への要望を率直に聞かせて欲しい旨、訪問の目的が述べられた。これに対して、各大臣からは感謝の念が表明され、各担当分野に関する被害の説明と我が国への要望が述べられた。その要望事項の概略は以下の通りである。

①(被害地域の特性)、この度のサイクロンは、ミャンマーの旧首都ヤンゴンとその周辺地区即ちヤンゴン管区とイラワジ管区を集中的に襲った。これらの地区は大都市のヤンゴンとイラワジ川およびアンダマン海に接する多数の人口を擁するミャンマーの穀倉地帯であるとともに漁業の盛んな地区であり、さらにミャンマーの輸出入の八〇パーセントをまかなう物流の中心であるヤンゴン港を抱えるミャンマーの中枢部である。

②(農業への支援)、風水害のため、村全体が消えてしまった地区が多く存在する。堤が決壊し多くの農地が海水で満たされた。これらの地区では、農耕用の水牛がほとんど流され失われた。被害を受けた農地は130万エーカーである。堤の修復は7月中に終える予定だが、水牛に変わるトラクターや耕耘機がいる。耕耘機が無ければ農地の開墾・耕作ができない。さらに、肥料が是非必要である。トラクター・耕耘機そして肥料の支援を願う。また、ミャンマーにはガスが出るが油がない。耕耘機を動かす油が欲しい。さらに、米などの生産性を高めるために、土地改良の技術を日本から学びたい。

③(ヤンゴン港等の復旧への支援) ヤンゴン港は、ミャンマーの物流の80パーセントを担う港であるが多数の沈没船によって現在は1万5千トン以上の船は港に入れない。また多くの栈橋も使えなくなっている。沈没船引き上げの為にサルベージ船が無いので支援を願いたい。また、港の測量の道具と技術の支援を頼みたい。さらに、港に至る各水路も破壊されていて港に物資を集めにくくなっており物流が滞って物価高をもたらしている。水路の復興に支援を願う。

④(気象レーダーへの支援)、1980年に日本の援助で設置された気象レーダーによりサイクロンが接近していることを知ることはできたが、既にレーダーは老朽化している。今後サイクロンの来襲を事前に詳しく察知して被害を未然に防ぐためにも、気象台の能力を高める必要があり支援を願う。

⑤(森造りへの支援)、海水が押し寄せて死者が多く出た海岸線には森がなかった。マングローブの森は災害を防ぐ。森造りに日本の援助をお願いする。



⑥（学校建設への支援）、被災地では、1500から2000の学校がつぶれた。子供達は今はテントで勉強している。従って学校建設に日本の支援を戴きたい。

3、（テイン・セイン首相との会談）

9日午後にテイン・セイン首相とネーピードーで会談したが、同首相と渡辺議連会長とは旧知の間柄であったので会談は一時間四十五分に及び、話題はサイクロン被害に止まらず、日本とミャンマーの関係全般に及ぶとともに、首相からミャンマーにおける民主化のプロセスに関して説明があり、2010年の選挙を経て民主化が明らかになれば、日本からの支援と投資を遮る条件が無くなり、ミャンマーと日本の歴史的友好関係を発展させることができるとの期待が表明された。首相はまず、この度のサイクロン被害に対する天皇陛下と総理大臣からの弔電と日本政府からの救援物資の送付に感謝の意を表明した。そして、日本とミャンマーの歴史的友好関係を語り、それに基づき日本からさらなる援助が為されることを強く期待している旨語った。首相が表明した日本への援助の要請については、上記2に記載した各大臣が要請した項目通りであったが、首相として農業と学校建設そしてヤンゴン港復興への支援を強く求めた。また、上記⑤の森造りへの支援は、同首相がアンダマン海岸地域の出身であるため、各大臣からではなく首相自身から為されたものである。また、渡辺会長から、5月のサイクロンの直後の混乱期にも関わらず、憲法制定の国民投票を予定通り実施し、民主化を進めていることを高く評価し激励する旨の表明が為され、それをうけて首相から2010年の選挙に至るミャンマーにおける民主化の説明が為された。



↑テイン・スエ運輸大臣と渡辺秀央議連会長の会談↑



←テイン・スエ運輸大臣→  
との記念撮影

→胸のブルーリボンが印象的  
的です



ミャンマーの特産品ルビーを貼り付けた絵画を贈呈される左：渡辺会長と右：西村幹事長

↑テー・ウー農業灌漑大臣から要望を聴く渡辺秀央議連会長



ニャン・ウィン外務大臣と会談後、左：渡辺秀央議連会長、中央：西村眞悟議連幹事長、右：松下新平参議院議員（宮崎県選出）



後ろの絵画はマンダレーの王宮



テイン・セイン首相と会談、同首相と渡辺秀央議連会長とは、旧知の間柄で会談は一時間四五分に及んだ。後ろのライトは報道陣のもの

松下新平参議院議員と

以上7月9日の予定、非常に友好的雰囲気で行われる

↓7月10日ヤンゴンに戻る、午前、チョー・ミン厚生大臣と会談



↓7月10日午後、チョウ・トウ外務副大臣と会談





4、(ヤンゴン港とヤンゴン市内の視察)

11日午後には、運輸副大臣の説明のもとに、ヤンゴン港を視察した。まず、港湾事務所にて被災直後のヤンゴン港の状況について映像をもとに説明を受けた。その後副大臣とともに船に乗り港を視察した。イラワジ川両岸には、未だ陸に打ち上げられた大型船が放置されている。特に右岸のヤンゴン市側の陸に放置されたフェリーや貨物船が多く見られ、右岸の浮き栈橋の多くは破壊されたままになっていた。また、ヤンゴン港内に沈没した船は155隻で未だ75隻が引き上げられずに沈んだまま放置されている。なお、ヤンゴン港は、アンダマン海から北に32キロ上流のイラワジ川のヤンゴン市側とアンダマン海方面に造られた港であり当然水は常に流れている。船での視察は、ヤンゴン市沿で実施された。アンダマン海方向には出なかったが、ここには沈没船が多く存在する。ヤンゴン市内は、幹線道路は既に復旧されいつもの数の車が走っている。被災直後は樹木や看板などの倒壊で、6車線の道路でも1車線しか使えなかった。しかし、幹線道路から路地にはいると、未だ倒壊した樹木や廃材が山積みされている光景が多く見られる。多くの樹木が倒れたことにより、大きく枝を張った太い幹の樹木が鬱蒼と生い茂る歴史的なヤンゴンの景観は失われて、不思議にも細く高い椰子の木が倒れずに目立っている。但し、人心は平穏で、托鉢の僧侶の姿もいつも通りで、人々はゆっくりと道路を歩き各所で黙々と壊れた建物を直している。



↑日本国建立の記念碑

← 7月11日午前中日本人墓地にて参拝、献花

渡辺秀央議連会長は“般若心経”を読経されました。そのあと西村眞悟議連幹事長は“海行かば”を唄われたそうです。19万英霊の方々も悦ばれたことでしょう。渡辺秀央議連会長は「何故かふと！思われ、上げたくなった」と言われたそうです。

↓ 11日午後運輸副大臣の説明を受けヤンゴン港を水上から視察、写真左、壊れたままの浮き栈橋、写真右、川岸に打ち上げられたフェリーその右に沈没船2隻、こうした光景が河口流域あちこちで見られるそうです。



↓ 7月12日マウン・マウン・スエ社会福祉救済復興大臣と会談



9日から12日迄の4日間でテイン・セイン首相と5人の大臣そして2人の副大臣と会談



←マウン・マウン・スエ社会福祉救済復興大臣と会談時の後ろの壁画  
「大時化のとき精霊が現れて王女を救った」と言われる伝説を形象化した絵

“ふろく”

7月12日ミャンマー出国まで3時間の空きが出来ましたのでヤンゴン市内散策



↑西村眞悟議連幹事長  
ミャンマー最大の聖地 “シュエダゴン・パヤー”



↑渡辺秀央議連会長のご子息で秘書の渡辺祐介さんも訪緬団に同行、頭の上に仏像が鎮座、めずらしいので載せました。



↑ヤンゴンの公園内、大通りから路地に入ると至る所で同じような光景を目にするそうです。



↑ホーチョーアウンサン・マーケット内  
木彫りの仏像を売る店‘美人なので’撮りました。  
半身不随の兄に涅槃仏を買い求めたそうです。



↑公園内にある“ビア・ガーデン”  
ここで“ミャンマービール”を一杯味よしのビールでお勧めの一品です。



## 5、視察を終えて

首相はじめ各大臣との会談は、日本とミャンマー建国以来の友好の歴史を確認することから始まった。当然、非常に友好的であり日本と日本人に対して好意を懐いてくれていることがよく分かる。そしてこの印象は、大臣以外の市井のミャンマーの人々と会っても変わらない。やはり、日本とミャンマーの友好の歴史を築き上げた先人の思いは現在に生きていると感じた視察であった。やはりミャンマーは、我が国にとって貴重な親日国である。ヤンゴンの日本人墓地には、先の大戦においてビルマ戦線で戦った日本軍の全ビルマ戦友団体が建てた「戦没者霊苑の由来」碑があり、そこには「ビルマの人々は日本軍を歓迎し、我々が勝っているときも負けているときも変わらぬ仏心で接してくれた。本当にありがとう。」と刻んであった。思えば、ビルマ戦線には30万人の日本軍が投入され19万人が戦死している。この惨状の中で、ビルマの人々は変わりなく親切に日本兵に接してくれたのである。この歴史を思えば、未曾有のサイクロンに襲われたミャンマーに、我が日本が率先して真に役に立つ援助を実施していくことは「人の道」として当然のことである。

また、ミャンマーの現政権は「軍事政権」といわれる。首相以下会った閣僚は外務・厚生をのぞき皆軍人であったから「軍事政権」には違いはない。しかし、共産党独裁の本当の「軍事政権」とは全く違う。既に述べたように、現政権は、サイクロン被害の中でも2010年の選挙に向けて着々と民主化のプロセスを進めている。このような時、民主化の模範解答を出してから援助を考えるという姿勢ではなく、我が国は民主化のプロセスを進めていることを評価してミャンマーを率先して助けるべきである。この度のサイクロン被害復興支援をきっかけとして親日国ミャンマーへの全面的支援を開始すべきであり、これが民主化を支援する道でもある。

(文責、議連幹事長、衆議院議員西村眞悟、写真説明ミャンマー教育推進プロジェクト同志会事務局)

## 7月16日 憲政記念館「第74回あたらしい道風船の会」にて日本ミャンマー友好議員連盟会長渡辺秀央参議院議員より帰国報告を頂きました。

ミャンマー国から種々案件が出されましたが、取り急ぎ日本国として重要と考える2案件に取り組んでいます。一つはミャンマーの海の玄関であるヤンゴン港に多数の沈没船があり1万5千トン以上の船が入港できなく、そのため国内の物流が滞り物価が高くなってきているが、サルベージ船が無いので困っている。調べてみると東南アジアにはサルベージ船が極めて少なく日本からの持ち込みも視野にいれ10月までに現地に届くようにしたい。二つ目の案件は1500～2000の学校が壊され、生徒たちはテントで勉強している。今後のことを考えてコンクリート造りにし、避難所の役割も兼ねたいとの申し入れ。従来の学校建設は日本円で150万円であったが、コンクリートで建設すると500万円になり総額100億円になり、一挙には無理なのでODAで3年から5年ですれば負担額も軽減され、これならば我が国にも無理が掛からないので検討中、ミャンマーと我が国の交流は、内戦による政情不安と最近のアメリカ主導の経済封鎖が原因で40年空白があり疎遠になっていたが、学校建設により40年の空白が、少なくとも20年は埋められると思っております。日本によって建てられた学校が、先生や生徒達に広く語り継がれ親日感情が生まれ育つ事と、ミャンマー国民の多くは仏教徒で報恩の精神が根付いていることです。次に教育は国の要でありこうした時こそ援助を惜しまないで他国に先んじてすることが、将来の国益に繋がり、現在日本の国力からしても充分対処出来ると思っております。又ご報告させていただきます。本日午後4時に高村外務大臣と話し合いを持ちますのでこれで失礼いたします。と午後4時ギリギリまで会場でお話下さいました。